16

易経と東洋医学との関わり

権藤　寿昭
ごんどう外科胃腸科クリニック

昨年の本学会では，わが国最古の本格的医書『医心方』を編集した安時代の殿上人・宮廷医である丹波康頼の話題を中心にして，康頼と同年代の殿上人・安倍晴明との関わりも含めて，中国伝来の陰陽五行説と我が国の伝統医学（多くは，中国から伝わった基本学理を元に江戸時代に漢方医学として結実する）との無視できない関わり，根底では両者に共通する基本原理の存在について述べさせていただきましたが，今回の演題では，この中心テーマであった「陰陽道」の，さらなる基本原理である『易経』と，伝統医学（東洋医学）との関わり，共通原理の存在について述べたいと思います．

中国医学は，古代中国の哲学理論である，陰陽論と五行学説という本来は別個の二つの学説を基本理論としています．特に陰陽論は「易」から出たもので四柱推命など占いに関係している．自然界の一切の事物，人体の生理，病理に対する認識，さらに病気の診断，治療に関する理解等，あらゆる分野の内容が，陰陽説で説明されるとする．その重要な原理の一つに，この宇宙・人間社会の動きの古来不変の大原則は，一状態がそのまま無変化で存続するのはありえないことで，必ず別の状態に変化し，さらに大局的には循環していくと言うものである．陰陽説は，人体の生理・病理の説明に深く関わり，（《傷寒論》など），わが国の伝統医学の基本原理の一つとなっていた．このように『易経』の中心思想は，陰陽二つの元素の対立と統合により，森羅万象の変化法則を説く．『易経』または単に『易』とも呼ぶ．通常，基本の「経」の部分である『周易』に儒教的な解釈による附文（十翼または伝）を付け加えたものを一つの書とする．その著者は神話時代の伝説上の人物である伏羲とされていて，陰陽の三通りの組み合わせで，八卦（乾，兌，離，震，巽，坎，艮，坤）を構成したとされている．ただ，八卦のみでは宇宙・森羅万象全てを読み解くには卦数が不足なので，これら八卦を上下に配置した，全ての組み合わせの六十四（＝8×8）卦が，かなり後の時代になって作成され，『周易』が最終的に体系づけられた．それを成したのが，あくまで伝説ではあるが，周初の文王とその子である周公とされている．更に時代が下って（春秋時代），孔子がこれに儒教的な解説（伝）を書いたとされていて，全部で十篇残されており（『史記・孔子世家』），『十翼』と総称されている．以上，伝承ではあるが，伏羲，文王・周公父子，孔子が『易経』の三聖と言われている．『易経』が，数千年もの古代からの書物にかかわらず，後世にまで生き残ったのには，その内容のクオリティによるのもさることながら，秦の始皇帝の焚書（紀元前213）に際しても，卜巫の書ということで，難を逃れたことも大きい．この『易経』は，儒教の筆頭経典扱いとされていて，他の儒教経典（『書経』，『春秋』等）に比べ，その内容や扱われ方に大いに異なったところがあると思われる．講演でも触れるが，この経典は西洋の学者にも大いに驚きを以て注目されて，現在でいうところのデジタル思考的な要素があるのは否定できない．それはともかく，『周易（易経）』のこうした理論体系の影響は，医学分野にも存在し，『黄帝内経』（漢）や後世の『類経』（明）や，その他に散見される．今回は，演者が原書とその抄訳を所有している近代・現代の医書に話題を絞って，ご紹介するつもりである．そして可能ならば，この『易経』の原理が，現代医学の重要な分野の一つである遺伝学の基本原理・DNAの構成要素である塩基の原理との奇妙な符合と仮説が，最近言及されていて（中国や日本からも論文が出ています．）それにも，若干触れてみたいと思う．